

タカラバイオ株式会社
平成29年3月期決算説明会 主要質疑応答内容

平成29年5月11日（木）

野村證券日本橋本社講堂（東京都中央区）

回答者 代表取締役社長 仲尾 功一、専務取締役 松崎 修一郎

新たにグループに加わった、WaferGen Bio-systems 社と Rubicon Genomics 社の業績へのインパクトについて説明して下さい。

- ・ まず、売上面ですが、買収直前期の WaferGen Bio-systems 社の売上は 11 億円、Rubicon Genomics 社が 13 億円でした。当然、今期はこれ以上の売上を予算として計上しております。
- ・ 費用面では、2 社の R&D 費や「のれん」等の償却費が発生することになりますが、当社グループの販売網の活用、製造のグループ内移管、R&D や管理部門の統合を行い、統合によるシナジー効果の中で吸収してまいりたいと考えています。
- ・ 一部、のれんの償却方針など固まっていないところがありますが、WaferGen Bio-systems のビジネスについては、今期は若干赤字になる計画です。これについては、グループ全体で吸収してさらに売上・利益で伸ばす計画です。
- ・ 今期の研究開発費の増加部分の大半この 2 社によるものですが、今後、中計期間中は米国を中心に 2 社の製品や新製品で売上を伸ばしていく予定です。

CDMO 事業で大手の新規参入が報道されているがどのように見えていますか。

- ・ 中期経営計画（5 月 9 日発表）にも掲げているように CDMO 事業ではナンバーワンを引き続き堅持してまいります。報道等で他社の参入が報じられているのは認識しておりますが、海外企業が保有する技術の国内導入のケースが多く、これから施設を建設するなど、本格化するには未だ時間がかかるのではないかと見ております。
- ・ 当社は、遺伝子治療の臨床開発を通じ再生医療等製品の開発に必要な技術や規制当局との交渉のノウハウを蓄積しており、これらを顧客に提供していくことが可能です。アカデミア、創薬ベンチャーなどの研究開発段階から本製造までご一緒できる体制になっています。
- ・ また、CDMO として提供できるメニューについては、iPS 細胞に偏っておられるところが多いようですが、当社では、iPS 細胞をはじめとした遺伝子導入細胞の製造・加工、ウイルスベクターの提供など幅広くメニュー化できていると自負しております。
- ・ さらに、施設面では、2014 年には滋賀県草津市に遺伝子・細胞プロセッシングセンター、本年には川崎市殿町地区のライフイノベーションセンター内に細胞加工施設を稼

働させるなど、関東・関西に実際に稼働している拠点を整備している点は強みだと感じています。

京都大学 iPS 細胞研究所との共同研究について説明して下さい。

- ・ 本年 1 月より共同研究を開始しました。京都大学 iPS 細胞研究所の再生医療用 iPS 細胞ストックプロジェクトの実施にあたり、同機関が考えている“アカデミアにおける GMP 体制の確立”について、当社が同機関の製造管理の体制について助言し、体制整備に協力します。また、iPS 細胞の品質評価の規格策定に関して両者で検討する予定です。
- ・ 当社としては、共同研究を通じて京都大学 iPS 細胞研究所が持つ iPS 細胞に関するノウハウを吸収し、iPS 細胞の品質評価に関する規格を策定し、これに関する製品やサービスを事業化することが可能となる点に魅力を感じています。

腫瘍溶解性ウイルス HF10 のメラノーマの国内第 II 相臨床試験について説明して下さい。

- ・ 今期中に目標被験者 25 例について、国立がん研究センター中央病院をはじめとする国内 12 施設で、皮膚がんの研究をされている先生方の協力を得て、投与を完了する予定です。
- ・ 途中経過については、機会をとらえて発表してまいります。
- ・ 米国第 II 相臨床試験の結果なども参考にしながら再生医療等製品もしくはオーファンドラッグとして、本中計期間中に上市を目指します。

HF10 の米国の開発状況を説明して下さい。

- ・ メラノーマを対象とした第 II 相臨床試験が実質的に終了しました。本年 6 月の米国腫瘍臨床学会での発表を準備しています。
- ・ 第 III 相臨床試験については、開発パートナーとの提携により開発を進めたいと考えています。この場合でも製剤については当社で製造することを考えています。
- ・ 提携先については、現在、探索・交渉中です。進捗がありましたら可能な範囲で報告いたします。

以上